

アメリカ学会会報

— The American Studies Newsletter —

No.186

November 2014

21世紀のアメリカ研究

佐々木 隆

「ここには連続性の裂け目がある一歴史的繋がりへの断絶がある！ これは現実なのか、それとも仮象に過ぎないのか？」

先の世紀転換期、シカゴ万国博覧会（1893）を訪れたヘンリー・アダムズは、リチャード・ハント・ドームの階段に座り込んで、途方にくれた。四つの20世紀の出来事がアダムズの「教育」に挑戦しようとしていた。1) 科学技術の進歩 2) 金本位制の採用 3) 恐慌 4) 新しい国際秩序の創出、であった。

私は、常々、戦後日本のアメリカ研究は、三つの世代によって担われてきた、と考えている。「氷川丸世代」、「727世代」、「コンピューター世代」の三つである。

私が「氷川丸世代」というのは、戦後間なしに、ガリオア奨学金などを得て、太平洋戦争を生き残った氷川丸などで、最初に「豊かな国アメリカ」へ留学した研究者たちのことをいう。

これらの方々は、エリート中のエリートである。この世代は、「成せば成る」の世代で、戦後、日本の学問を復興させ、日本のアメリカ研究の礎を築いてくださった方々である。

「727世代」は、私たちの世代だ。「氷川丸世代」の先生方から教えを受け、「ボーイング727」で留学した世代だ。私たちの世代は、「氷川丸世代」に較べると、いささか素直さに欠ける。

私たちの世代は、大学紛争の世代だ。ベトナム戦争、人種問題、ドル危機、オイルショック、ウォーターゲート事件と、私たちは、「理想の国アメリカ」もさまざまな問題に悩まされていることを目の当たりにしてきた。したがって、我々の世代のキャッチ・フレーズは、「ほんまかいな」だ。「ピューリタン精神」も「フロンティア・スピリット」も、まずは、「ほんまかいな」と疑ってみる。

そして、現在、私たちが共に学んでいる学生諸君が「コンピューター世代」。彼らは、時間も距離も跳び越えて、コンピューターを介して瞬時に世界中の人々と意見を交換し合う。この世代のキャッチ・フレーズは、「おもろいやん」だ。

「コンピューター世代」は、「豊かさ」のなかに生まれた。生まれた時から、テレビもあれば、電気冷蔵庫もあり、自動車もある。彼らは楽しむことに罪悪感をもっていない。というわけで、春4月、院生諸君が提出する修士論文の「研究計画書」に、私たちは、しばし、目を見張る。「ヒップ・ホップ・ミュージシャン・トゥバック・スクラについて」、「ハンナ&バーバラのアニメーション」、エトセトラ、エトセトラ。

しかし、近年は、我々の誰もが、「おもろいやん」だけではすまされない事態に立ち至っていることを実感しつつあるのではないだろうか。

先の世紀転換期を研究した歴史家のヘンリー・スティール・コマジャーは、1890年代のアメリカ社会を「分水嶺の時代」と呼び、1877年から1920年のアメリカ社会をとりあげたロバート・ウィービーは、自著に『新たな秩序を求めて』（1967）という表題を選んだ。そして、これらの言葉は、21世紀の世紀転換期にもそのまま当てはまるのではないか。ヘンリー・アダムズを悩ませた四つの20世紀的問題のうち、「金本位制」は「サイバー・マネー」、「恐慌」は「バブルの崩壊」と言い換えてもよい。

加えて、21世紀の問題は、地球規模となり、より複雑さを増している。

脱中心的で脱領土的なサイバー・マネーと、19世紀的インペリアル・パワーを体現するハイテク軍事力との非対称はどうか考えればよいのだろう。多くの問題を抱えつつも、台頭する中国にはどう対応すればよいのだろうか。

今世紀においても、我々アメリカ研究者が、それぞれのケース・スタディーを着実に積み重ねていくことが基本であることは言うまでもない。しかし、それと同時に、個々の事例研究は、激変する世界という、より広い文脈にどのように位置づけることができるのかを、我々は常に考えておく必要があるだろう。21世紀、アメリカ研究が置かれてきた西欧近代の座標軸は確実に変移しつつあるように思われるからだ。

（同志社大学）

アメリカ学会役員一覧（2014～2015 年度）

会長

松本 悠子（中央大）

副会長

小檜山 ルイ（東京女子大）

生井 英考（立教大）

常務理事

中野耕太郎（大阪大） 総務担当

樋口 映美（専修大） 総務担当

貴堂 嘉之（一橋大） 財務担当

佐藤千登勢（筑波大） 財務担当

長畑 明利（名古屋大） 年次大会企画担当

高橋 裕子（津田塾大） 年次大会企画担当

川島 浩平（武蔵大） 国際委員会委員長

下河辺美知子（成蹊大） 年報編集委員会編集長

高尾 直知（中央大） 英文ジャーナル編集委員会委員長

須藤 功（明治大） 清水博賞選考委員会

和田 光弘（名古屋大） 斎藤眞賞選考委員会

岡山 裕（慶應義塾大） 広報・電子化情報委員会担当

理事

阿部 珠理（立教大）

生井 英考（立教大）

伊藤 裕子（亜細亜大）

宇沢 美子（慶應義塾大）

遠藤 泰生（東京大）

大津留（北川）智恵子（関西大）

大森 一輝（北海学園大）

小塩 和人（上智大）

越智 博美（一橋大）

小野沢 透（京都大）

川島 浩平（武蔵大）

貴堂 嘉之（一橋大）

久保 文明（東京大）

小檜山ルイ（東京女子大）

舌津 智之（立教大）

高橋 裕子（津田塾大）

竹沢 泰子（京都大）

巽 孝之（慶應義塾大）

中條 献（桜美林大）

中野耕太郎（大阪大）

長畑 明利（名古屋大）

西崎 文子（東京大）

新田 啓子（立教大）

樋口 映美（専修大）

肥後本芳男（同志社大）

藤本 博（南山大）

増井志津代（上智大）

村田 晃嗣（同志社大）

森本あんり（国際基督教大）

矢口 祐人（東京大）

和田 光弘（名古屋大）

渡辺 靖（慶應義塾大）

岡山 裕（慶應義塾大）

佐藤千登勢（筑波大）

高尾 直知（中央大）

下河辺美知子（成蹊大）

須藤 功（明治大）

清水さゆり（ミシガン州立大）

監事

田中きく代（関西学院大）

李 鍾元（早稲田大）

緒方 房子（帝塚山大）

評議員

喜納 育江（琉球大）

山岸 敬和（南山大）

西谷 拓哉（神戸大）

大類 久恵（津田塾大）

大塚 寿郎（上智大）

倉科 一希（広島市大）

川島 正樹（南山大）

石原 剛（早稲田大）

青野 利彦（一橋大）

後藤 和彦（立教大）

橋川 健竜（東京大）

落合 明子（同志社大）

野口 啓子（津田塾大）

名和 洋人（名城大）

簗原 俊洋（神戸大）

飯島 真理子（上智大）

飯田 文雄（神戸大）

梅崎 透（フェリス学院大）

土屋 由香（愛媛大）

渡辺 将人（北海道大）

中野 聡（一橋大）

中山 俊宏（慶應義塾大）

大辻千恵子（都留文科大）

大串 尚代（慶應義塾大）

前嶋 和弘（上智大）

石川 敬史（東京理科大）

石井 紀子（上智大）

西本あずさ（青山学院大）

西山 隆行（成蹊大学）

杉山 直子（日本女子大）

諏訪部浩一（東京大）

上野 継義（京都産業大）

上村 直樹（南山大）

上山 隆大（慶應義塾大）

松原 宏之（横浜国大）

小山久美子（長崎大）

山縣 宏之（立教大）

佐藤 円（大妻女子大）

佐久間みかよ（和洋女子大）

高野 泰志（九州大）

高木真理子（愛知学院大）

高田 馨里（大妻女子大）

戸谷 陽子（お茶の水女子大）

兼子 歩（明治大）

宮本 敬子（西南学院大）

吉原 真里（ハワイ大）

鎌田 遵（亜細亜大）

『アメリカ研究』第50号「自由投稿論文」募集のお知らせ

学会機関誌『アメリカ研究』（年報）は2016年3月に第50号を刊行する予定です。会員諸氏の積極的な投稿をお待ちしています。

1. 内容 アメリカ研究に関する未発表論文、もしくは進行中の研究ノート。前年度『アメリカ研究』もしくは『英文ジャーナル』に論文・研究ノートが掲載された方は、本年度の投稿をご遠慮ください。また、同じ年度に、あるいは年度をまたいで『アメリカ研究』と『英文ジャーナル』の双方に投稿することはできません。これはなるべく多くの会員に発表の機会を提供するためです。
2. 枚数 論文は33字×34行のレイアウトで19ページ以内（註を含む）。研究ノートは同形式で8ページ以内。
執筆要項は学会ウェブサイトを参照のこと。
<http://www.cis-trans.org/jaas11/index.html>
3. 原稿締め切り 2015年9月22日（火）当日消印可
4. 提出部数 3部（コピー）提出原稿は不採用の場合も返却いたしません。

*投稿希望者は、論文題目を2015年6月末日までに電子メール（nenpo@jaas.gr.jp）で、年報編集委員会宛てにお申込みください。

『アメリカ研究』第50号「特集論文」募集のお知らせ

『アメリカ研究』第50号の特集テーマは「占拠・占領・支配」と決まりました。「特集論文」に応募希望の会員は、2015年6月末日までに、氏名・所属・論文題目および高層・資料などの説明（400字程度）を電子メール（nenpo@jaas.gr.jp）で、年報編集委員会宛てにお申し込み下さい。その際のタイトルは「『アメリカ研究』特集応募」と明記してください。執筆要項は学会ウェブサイトを参照のこと。<http://www.cis-trans.org/jaas11/index.html> 締め切りは2015年9月22日（火）当日消印可

英文ジャーナル第27号原稿募集のお知らせ

The Japanese Journal of American Studies—Call for Papers

JAAS members are invited to submit proposals for papers to be included in the 27th issue (June 2016) of the *Japanese Journal of American Studies*. Papers on any topic within the field of American Studies, including those related to this issue's special topic, "Japan and the United States," are welcome.

As always, we welcome papers that shed light on aspects of American ways of life, society, history, literature, politics, economics, law, art and architecture, etc. For the coming issue, we would also like to see papers dealing with various aspects of the long-standing relation between Japan and the United States, whether historical, cultural, political, economical, or all of the above.

Proposals, consisting of a title and abstract (approximately 300 words), are due by January 21, 2015, and should be sent to the *JJAS* Editorial Committee via email at engjournal@jaas.gr.jp as attached electronic files. Completed manuscripts will be due May 6, 2015 (maximum 8000 words, including notes) and should also be sent to the above email address. Papers must be written in English, based on original research and previously unpublished. Authors may submit only one proposal per issue.

Naochika Takao, Editor, *JJAS*.

会員みなさまにお願い

ご住所・所属等の変更が生じた場合には、速やかに事務局<office@jaas.gr.jp>までお知らせください。また、メールアドレスを登録されていない方は、極力ご登録くださいますようお願いいたします。

事務局

松原宏之 著

『虫喰う近代——一九一〇年代社会衛生運動とアメリカの政治文化』

(ナカニシヤ出版, 2013 年, 4,104 円)

本書は、1910 年代に高揚した反売買春運動に関与した多様なアクターがいかに連携・競合・対立を繰り返しながら、アメリカの秩序や権威を模索していたのかを描き、19 世紀型国家とは異なる新しい政治文化創出の現場として革新主義期を描き直そうとした歴史研究の書である。思索の跡をそのまま文字に刻む独特のリズムある文章で、方法論的にはカルチュラル・ターン後の歴史学として、アメリカ史に留まらず日本の歴史研究全般に一石を投じる内容となっている。

序章では、これまでの都市下層民を規律化するためとする近代化論や生政治論に沿った先行研究を批判し、第 1 章では、白人奴隷問題の隆盛から売買春問題委員会の設置に至る過程が決して一貫したものではなく、後者の「事実」調査による「科学」的手法の採用が旧秩序への挑戦であったことを示す。第 2 章では性衛生学のモローの軌跡を辿り、「社会的病」としての性病への対応から生まれるべくして生まれた医科学が抱えた、管理売春派との対立、差別化を目指したはずのソーシャルワーカーらとの奇妙な盟友関係を描き、第 3 章では逆に 19 世紀的な有徳な「個人」による私的な慈善とは異なる、「社会」の改良を目指すソーシャルワーカーの実践力を描く。第 4 章では、1914 年に設立されたアメリカ社会衛生協会について、これが上記の二大アクターに加えロックフェラー・ジュニアを加えせめぎあい、娼婦をアメリカの世界史的使命と描くことで最終的に乗り切りを図ったと指摘する。第 5 章では、科学権威をめぐる闘争が机上からついに戦場での実践へとシフトする中、第一次世界大戦期の基地厚生活動委員会に着目する。同委員会が推進した「アメリカン・プラン」の分析でも、そこに旧政治秩序の動揺への不安を読み取り、戦時における実効性という規準が既存の権威の批判者をも呼び込み、YMCA などの民間団体や女性活動家らの現場を知る者との連携を促した。第 6 章では、停戦後の同委員会の終幕の過程を分析し、各アクターが平時での活動継続を目指しながらも、テクノクラートが民間団体との連携を解消し独り立ちを目指したことで、新しい政治文化を構築するための連携・野合が瓦解し、結果として虫喰い状に空洞をうがれた社会衛生運動がアメリカ社会に残される、その挫折を描く。

筆者が終章で述べる、1910 年代の反売買春運動の内奥に負った重い挫傷、やせた「科学」、そして「虫喰う近代」の問いかけは、その後のニューディール研究や福祉国家論との連続を考えると深い意味を持っている。本書の方法には、売買春の当事者たる女性らが不在であることなど批判すべき点もあるだろう。しかし、ジェンダー史の新天地を開き、社会史の次なる段階への跳躍を目指した本書の政治文化史の試みは、一読に値するものであることは間違いない。

貴堂嘉之 (一橋大学)

樋口映美・貴堂嘉之・日暮美奈子 編

『〈近代規範〉の社会史——都市・身体・国家』

(彩流社, 2013 年, 4,104 円)

本書は、〈近代〉がつくられた淵源に立ち戻って、その形成過程を検証しようとするものである。これまで、〈近代〉形成の歴史に関する研究は、国民国家に焦点をあて「国民になること」や「国民」の境界を論じる傾向があったが、本書は、秩序形成の現場である「社会」に注目し、〈近代〉形成の時期に徐々に人々の生活に入り込み、その日常を規定するようになった近代規範の具体的な形成の歴史を描こうと試みている。

第一部「都市」では、樋口映美会員が第 1 章で、19 世紀初めのサウスキャロライナ州チャールストンにおいて、デンマーク・ヴィシーらにより計画された奴隷蜂起が未遂に終わり、州法の制定によって奴隷制社会の秩序の強化を目指す白人住民による監視社会が誕生した様子を描いた。第 3 章では、兼子歩会員が 20 世紀前半のニューヨークにおいて、売春など道徳的頹廢の元凶とみなされていたダンスホールを〈健全〉化し容認しようという動きが出てくるなかで、〈正しい〉セクシュアリティおよび人種の境界線が設定されたことを示した。

続いて第二部「身体」では、貴堂嘉之会員の手になる第 6 章が、革新主義時代に人々が熱狂した健康優良「赤ちゃん」コンテストが優良「家族」コンテストへと移行する過程について述べるとともに、これらのコンテストが当時の人々に「健康な身体」を規範化し、健康を強制する契機となったことを描いた。同じく優生学とくに各州で制定された断種法を扱った第 7 章では、小野直子会員が、文明の強化のためには市民は健全な精神と健康な身体を必要としているという主張のもと、優生主義者たちが「適者」がより多くの子供を持つことを推進する一方で「不適者」の生殖を阻止しようとした過程を論じた。さらに、第 8 章では平体由美会員が、集権化が不可能であるというアメリカ連邦制の下での公衆衛生行政のあり方に着目し、20 世紀初頭の鉤虫病対策が、ロックフェラー財団の国際保険協会 (IHC) など民間の力を借り、「個人的行為としての健康維持」から「国民としての健康管理」へと推移していく模様を描いた。

第三部「国家」では、高田馨里会員が第 10 章において、米軍当局および陸軍省の人種隔離への対応が、1943 年夏に各地で起こった人種暴動を契機に様々な「是正措置」を採用するに至った経緯をたどり、根強く人種差別を是としてきた社会秩序に対し国家がどのように介入したのかを明らかにした。

本書には、これら六編のほかにも、ドイツ、イギリス、日本を扱った章がそれぞれ二編ずつ収められており、幅広い時代と地域を扱っている。これらの論考を含め本書は全体として、「排除」の力学と「包摂」の力学が近代秩序および規範の形成に果たした役割は一樣ではなかったことをあざやかに描いている。前者と後者が対立する場合もあれば、競合し錯綜する場合もあった。本書はこうした多様なあり方を「社会」に焦点をあてることで日常から掘り起こそうとしている。大変興味深いテーマであるだけに、中国や東南アジア等について触れている論考が含まれていたらなお嬉しかった。

北 美幸 (北九州市立大学)

山口ヨシ子 著

『ダイムノヴェルのアメリカ——大衆小説の文化史』

(彩流社, 2013 年, 4,104 円)

19 世紀後半から 20 世紀初頭に出版された「ダイムノヴェル」は、価格の点でも文化現象の観点からもアメリカに「革命」をもたらした。ダイムノヴェルは上流・中流階級の娯楽であった読書に、労働者階級という社会階層を取り込み、やがては「特定の階層、職業を対象とした小説」へと変貌をとげる。だが、しだいに「教育的ではない低俗な読物」とみなされ、研究対象としても不十分であるかのように扱われてきたため、今日までダイムノヴェルとその作家についての分析は少ない。

「しかし」、と著者は反駁する。「大勢の人びとがダイムノヴェルを購入し、または貸借して読んだという事実は動かし難く、そのような「低俗」といわれる物語のなかにこそ、歴史書や純文学所には記録されることのなかった歴史的・社会的・文化的諸相が表れることになる。」この確信のもと、著者のダイムノヴェルを巡る旅は始まる。

第一章は、ダイムノヴェル出版の元祖であるビートル社の作品の中で最も売れた『マラエスカ』（アン・S・スティーヴンス作, 1860）と『セス・ジョーンズ』（エドワード・S・エリス作, 1860）を取り上げ、インディアンや冒険アクションを加えることでビートル社が「ダイムノヴェルを愛国主義的なプロジェクトとして」位置づけていたことや、フロンティアのハンターの姿を表紙絵にすることで「ヒーローの姿を明確にヴィジュアル化」し、「読者の共通認識に訴え」ながら、ダイムノヴェルがアメリカン・ヒーローの形成に与していたことを明らかにする。第二章では、メック・V・ヴィクターの『モーム・ギニーとそのブランテーションの「子供たち」』（1861）を同時代の奴隷問題をテーマにした他作品と比較し、反奴隷小説も奴隷擁護小説も大衆の心理、すなわち「白人優越意識や黒人恐怖症」を内包していると論じる。第三章はエドワード・L・ウィーラーの描く無法者ヒーローとヒロイン、デッドウッド・ディックとカラミティ・ジェーンが、それぞれ探偵小説やフェミニスト・ウエスタンともいえる新しい文学ジャンルにつながることを示す。第四章はダイムノヴェルが、探偵小説の本質の問題である語りの人称問題にすでにいち早く取り組んでいたことを指摘する。第五章では SF ダイムノヴェルの作品群、第六章ではワーキングガールを読者層とした恋愛小説にも言及し、異なるジャンルの作品で多様な読者層を獲得していたダイムノヴェルの特徴や影響力を精緻に分析する。

各章が一冊の本になりうるほどの情報量の多さと内容の濃さゆえ、本書はみごとに「ダイムノヴェルをめぐる歴史を手探ることで掘り起こされるアメリカ社会の底辺に蓄積された庶民の文化的営為の記録」となっている。文学史の「表舞台」に立つ同時代の作家（メルヴィル、ストウ、トウェイン、オルコット、ポオなど）とその作品が随所で言及され、ダイムノヴェルの特徴や意義がより明快になっているのも本書の魅力である。

著者がダイムノヴェルの現物を手にしたときに感じた「理不尽な世の中の現実をかわし、つらい労働を耐え抜くよすが」として読書を楽しんだ労働者たち、すなわち

「芸術的価値を第一義に考える文学研究では浮上することのない人々」の姿が、時空を超えて私たちに伝わってくる稀有な研究書である。

田辺千景（学習院大学）

高野泰志 編著

『ヘミングウェイと老い』

(松籟社, 2013 年, 3,672 円)

作家ヘミングウェイには老成のイメージが付きまといながら、その文学における「老い」はさほど研究されてこなかった。あるいはまた、『老人と海』が実はヘミングウェイが 52 歳のときの作品であることをふまえれば、そこにある「老い」の意味を改めて検討する必要があるのではないか。こうしたヘミングウェイと老いをめぐる一連の問題が、本書の出発点にあるようだ（高野「序章」）。実際、本書の執筆陣はそうした問い直しに意欲的に取り組んでいる。しかし、そのようにヘミングウェイ文学を客観的に読み解く批評行為は、本書の魅力の 3 分の 2 あるいは半分を占めるに過ぎないのではないか。その残りについては後回しにして、あるいは、実はそれを語るに一番の近道であるのかもしれないのだが、本書の構成を紹介したい。

序章を除く 11 章からなる本書は 6 部構成で、各部には以下のような題がつけられている。「ヘミングウェイと伝記」、「若きヘミングウェイの描く老人」、「ヘミングウェイとその他の作家の老人表象」、「詩から読むヘミングウェイの老い」、「河を渡って木立の中へ」再評価、「『老人と海』再評価」。これらのセクションタイトルがよく示すように、本書のキーワードの一つは再評価である。さほど研究の進んでいない短編、評価が著しく低い『河を渡って木立の中へ』、そして散文の完成度によって日の目を見ない詩作品などが正面切って扱われ、これまでのヘミングウェイ研究の穴を埋める。また、晩年のヘミングウェイ作品の傑作として一般の評価も高い『老人と海』に関しては、前田一平が従来の無条件の賞賛を問い直す読み直しを行う。この前田の論考と今村橋夫、島村法夫、前田、高野泰志の四氏による『老人と海』討論会からなる第 6 部では、そうした用語こそ使われないものの、エドワード・サイードが言う晩年のスタイルの問題が追及され、読みごたえがある。

注目したいのは、まさしくこの討論会が例示するように、執筆陣が世代において多岐にわたる点だ。勝井慧や堀内香織といった若手研究者から島村、今村、千葉義也といった重鎮までが「老い」というテーマからヘミングウェイ文学に接近することで、自ずと執筆者自身の立ち位置もが前景化される。ヘミングウェイ文学を鏡として映しだされる執筆者たちの姿勢こそ、本書の最大の魅力のように思えてならない。あるいは、スリリングな討論会が俎上に載せるのは、文学作品の評価が読み手の年齢の積み重ねによって変わってくるという問題である。そうした文学を読むことのパーソナルな問題にまで、本書は臆することなく踏み込んでいく。文学研究の本質的な部分を引きだすヘミングウェイ文学自体と、その文学に誠実に向き合う文学者たちの気概が、本書を通じて味わえるだろう。

辻 秀雄（首都大学東京）

諏訪部浩一 著

『ノワール文学講義——A Study in Black』

(研究社, 2014 年, 2,268 円)

ハードボイルド小説の代表作を精密に読解した『「マルタの鷹」講義』(研究社, 2012 年)で注目浴びた諏訪部氏による本書は、「ノワール小説」というジャンルについて、マニア的な熱意とアメリカ文学研究者ならではの視野と緻密な考察によって、ポピュラー・カルチャーに関する本としては類のないものとなっている。まず 1930 年代初期ノワールの見取図を示す「黒い誘惑——初期ノワールについて」では、主人公が (1) 閉塞した状況に置かれ、(2) そこからの脱出を試み、(3) それに失敗する物語という「ノワールの構造」を抽出してみせ、それぞれ (1) リアリズム、(2) ロマンズ、(3) 悲劇という、小説のジャンルそのものの分類につながる点を指摘する。

次の「ノワール小説の可能性、あるいはフィルム・ノワール」における、ノワール小説の起源が自然主義文学にあるとする指摘は、確かにアメリカ文学研究者ならではの視点で新鮮かつ説得力を持つ。さらに 1930 年代に代表作が多く書かれているノワール小説が 1940 年代になってフィルム・ノワールとして映画化されるという「時間差」を引き起こした「ヘイズ・コード」(映画制作倫理規定)が、逆に性や暴力を直接描かない抑制的な語り口を生み出し、原作以上に主題が引き出されているという映画化の評価も興味深い。

探偵(サム・スベード)がファム・ファタールの誘惑に打ち勝ちつつ母的な女性(秘書)に拒絶される事で、父権的な秩序の機能不全を露わにし、フィリップ・マローウのホモ・ソーシャルで孤独なミソジニストとしての態度につながると分析するのは「ファム・ファタール事件簿——ハードボイルド探偵小説の詩学」の章である。これを敷衍すると、アメリカ小説や映画の男性主人公の多くも、ホモ・ソーシャルでミソジニストであり、敢えて言えば他者としての人間を理解できないミザンソロープでもあるという見解ともリンクする。

最後の 3 つの章は、ロマンス対リアリズムへの葛藤から、探偵を主人公とするリアリズム小説とも言える傑作ハードボイルド小説を書いて一つの文学ジャンルを確立したハメットの成長と停滞を描いている。つまり『ガラスの鍵』において、純文学の系譜の中に位置づけられる作家として成長したために、結果としてロマンスとしてのハードボイルド小説を書き続ける事が不可能になった経緯が仔細に語られている。

諏訪部氏があとがきでも述べているように「アメリカ文学研究者」として書くというスタンスは有効で、アメリカ文学史という大きな枠組みの中だからこそ、自然主義という起源やロマンス対リアリズムという構図を指摘できたと言える。そしてハードボイルド小説のロマンス対リアリズムをどのように止揚するかがノワール小説の条件でもあり、それはノワールという映画と小説を含む横断的な、形式を脱構築したジャンルへとつながる。

(本城誠二 北海学園大学)

山下 昇 著

『ハイブリッド・フィクション』

——人種と性のアメリカ文学』

(開文社出版, 2013 年, 2,592 円)

「黒人女はこの世の驃馬だ」と言ったのは、ゾラ・ニール・ハーストンの小説の一登場人物であった。元奴隷の彼女が、「ハイブリッド」という語が「驃馬」を用いて説明されたのを知っていたかどうかは知る由もないが、彼女の認識の鋭さに異議を唱える者はいないだろう。本書は、元奴隷の黒人女性がさように看破した人種と性との交錯が、一九世紀および二〇世紀アメリカ文学にいていかに描かれてきたかを論じている。

読者はまず目次をみて、構成に関して著者が苦渋の決断をなしたと想像するかもしれない。第一部「男性作家」では、ナサニエル・ホーソーン、マーク・トウェイン、ウィリアム・フォークナー、ラルフ・エリソンが取りあげられ、続く第二部「女性作家」では、ジェシー・フォークセット、ネラ・ラーセン、ゾラ・ニール・ハーストン、アン・ペトリ、アリス・ウォーカー、トニ・モリスンが考察される。これほど多くの作家作品論をまとめるのであれば、人種による組分け、すなわち「白人作家」と「黒人作家」という二部構成も可能であっただろう。しかし、なぜあえてジェンダーの差異をもとに本書は構成されたのか。その問いを念頭に置きつつ注意深く読み進めることが、ハイブリッドな主題とハイブリッドな手法との有機的関連性の理解へとつながるのだろう。

さて、イヴ・セジウィックのジェンダー批評をふまえたスリリングな『緋文字』論で始まる第一部は、著者が専門とするフォークナー論に向かって盛りあがりを見せる。著者はすでに『一九三〇年代のフォークナー——時代の認識と小説の構造』(一九九七)において『エルサレムよ、汝を忘れたならば』の形式的特徴を分析している。一方、本書では『エルサレム』を「中絶と出産」に焦点をあてて論じ、フォークナーの本小説を「二〇世紀の『緋文字』」と結論づける。これに加え、研究者からのさらなる反応が予測されるものとして、「冷戦ナラティヴ」の視点から解説したエリソンの『見えない人間』論も挙げることができる。著者は、ハイブリディティの概念を積極的に推し進めた作家としてのエリソン像に見直しを迫り、彼の代表作が「冷戦初期という時宜を得て、その目新しさと華やかな表現故に賞賛されたというのは余りに手厳しい評価だろうか？」と問う。

続く第二部では、国内ではまだ論じられることが少ないジェシー・フォークセットの『プラム・パン』や『アメリカ式の喜劇』が詳しく取りあげられている。また、ウォーカーやモリスン論などでは、相対立する見解を示す先行研究について、それら批評が生み出されたコンテクストを振り返り、それぞれの議論の不十分な点を指摘し、丁寧に補足する。以上のように、多数の作品の先行研究を手際よく紹介し、かつ新たな見解を提示する本書は、アメリカ文学における人種と性という、依然として看過できない問題を論ずる際に参照されるべき一冊である。

深瀬有希子(東京理科大学)

和田光弘 編著

『大学で学ぶアメリカ史』

(ミネルヴァ書房, 2014 年, 3,240 円)

本書は、同じ出版社から刊行された野村達朗編著『アメリカ合衆国の歴史』の後輩かつ最新版であると編者が述べているように、米国の歴史を概観したものである。時代は、北米大陸文化の黎明期から 2013 年のデフォルト回避までを取り上げている。

先輩格の『アメリカ合衆国の歴史』と決定的に異なるのは、その歴史を「先住民の世界」から始めている点だろう。第 1 章は、北米大陸への人類の移住に始まり、紀元前 1 世紀頃に見られた農耕生活、そしてその後、ヨーロッパ人の入植が始まるまでの時期に見られた各地独自の生活様式を詳しく解説している。

また、植民地時代から 19 世紀までの比較的古い時代を扱った章が多いことも本書の特徴である。全 12 章構成の本書において、この時代は、第 2 章「植民地時代」、第 3 章「アメリカ独立革命」、第 4 章「新共和国の建設」、第 5 章「市場革命と領土の拡大」、第 6 章「南北戦争と「再建の時代」」、第 7 章「金びか時代から革新主義へ」の 6 章で取り上げられている。植民地時代をのぞくと、各章は 30 年前後の期間を扱っており、政治経済および戦争の歴史を中心としている。とはいえ、社会的な側面も随所で叙述されており、さらに「共和国の母」や人種混交とセクシュアリティなど、ジェンダー視点も導入されている。

一方、20 世紀については、第 8 章「第一次世界大戦と黄金の 1920 年代」、第 9 章「ニューディールと第二次世界大戦」と時代ごとに語られた後、第二次世界大戦後の歴史については第 10 章「第二次世界大戦後から 1970 年代までの内政と社会」、第 11 章「冷戦とアメリカ外交」と、社会と外交を分けられ、そして最後に第 12 章「1980 年代から 21 世紀へ」で閉じられている。これは、『アメリカ合衆国の歴史』の構成を踏襲しているといえよう。20 世紀の各章には、文学界の動き、映画やスポーツ、音楽などの文化的側面、郊外の生活などのライフスタイルも描かれ、さらにグラフィティの図版が採用されるなど、政治面の記述がメインの 19 世紀までの章と趣が若干異なっている。

各章は、年表と概要からはじまり、随所に図版や地図、歴史的な史料が挿入されている。章末の参考文献は、各時代を概観するものと、各主題を掘り下げたものそれぞれが複数冊あげられている。さらに巻末には、「アメリカ史を学ぶためのウェブサイト案内」があり、2013 年 11 月現在の最新情報を得ることができる。各章はそれぞれの専門家が書いており、章によって取り上げる話題の偏りがみられるものの、書き口はすっきりシンプルでわかりやすく、また内容は網羅的で余計な記述が省かれている。「執筆者紹介」のページには、各章の担当者の顔写真と読者へのメッセージがあり、親しみをおぼえやすい。本書は、高校で世界史を学んで歴史好きになった学生が、大学でさらに歴史の勉強を深化させるのにうってつけの教科書といえる。ただし、近頃めっきり本を買わなくなった学生向けに教科書として指定するには、ちょっと高額の影響を受けた。

豊田真穂 (関西大学)

片桐康宏 著

Black Freedom, White Resistance, and Red Menace: Civil Rights and Anticommunism in the Jim Crow South

(Louisiana State University Press, 2014 年, \$47.50)

本書は市民権運動期の南部における「人種」をテーマとする片桐康宏氏 (九州産業大学) による、「ミシシッピ主権委員会」に関する前著に続く、深南部の「大衆的反抗 (Massive Resistance)」をテーマとした、米国で出版された二冊目の単著である。前著では「州権論」に基づくジムクロウ体制堅持の正当化論が分析されたが、本書は 1950 年代から 60 年代にかけて白人優越主義者に盛んに用いられ北部でも支持された反共主義レトリックに焦点を当てた一次資料に基づく包括的研究である。

序章ではブラウン判決 (1954 年) によって「人種」現状維持派が「共産主義」と同義として「人種統合」に対する組織的反発を開始するまでの前史が描かれる。冷戦下の米国では「反共」のお題目は政治家にとって言わば殺し文句であり、ブラウン判決の 7 ヶ月後にまとめられた下院非米活動調査委員会 (HUAC) による報告書『共産主義の黒人への浸透』はブラウン II 判決 (1955 年) のトーンダウンした実行指示判決にも反映されたのである。

第 1 章は本書著者が反共主義イデオログとして注目する二人、ローマン (Myers G. Lowman, 1904-1973) とマシューズ (J. B. Matthews, 1894-1966) の背景が分析される。ペンシルヴァニア州生まれのローマンはオハイオ州シンシナティでメソジスト派信徒組織を立ち上げて南部白人優越主義者にとって貴重な擁護者として全国的にも名を馳せる。彼を理論と実践面で助けるのが、ケンタッキー生まれでニューヨークを拠点とするマシューズである。彼は 1932 年にソ連を旅行するほど熱心な共産主義者となるが、間もなく離党して後終世米共産党 (CPUSA) に強い反感を抱き続ける。両者が共通の敵とするのは社会主義と親和的な社会的福音派である。以下の章でほぼ編年的に州ごとの分析がなされる。

第 2 章では「人種統合」は「共産主義者による破壊工作」とする見方に先鞭をつけたルイジアナ州に焦点が当てられる。続いて第 3 章ではジョージア、第 4 章ではアーカンソー、第 5 章ではテネシーおよびフロリダ、第 6 章ではミシシッピ、第 7 章ではアラバマの各州に焦点が当てられる。看過できないのは既得権を伴う差別の維持に固執する人々のみならず、南部メソジスト派教会関係者を含む聖職者による二名の反共主義者への反発にも目が配られている点である。ローマンのシンシナティにおけるかつての盟友デイヴィッド・サゲサー (David Sager) は 1967 年にローマンを損害賠償で訴える。

同時に目を引くのは標的に対するローマンの執拗なまでの持続的攻撃である。「人種統合主義」を「共産主義」と同一視する傾向は死滅しつつあるが、それは「緩慢な死」でしかない。二つの強力な連邦法の成立以降もローマンらの抵抗は続く。北部も巻き込んだ南部の「非アメリカ的経験」は全国レベルで反共デマゴグが排斥された後も 20 年間以上威力を発揮し続け今も痕跡を残す。

川島正樹 (南山大学)

菅 英輝 編著

『冷戦と同盟——冷戦終焉の視点から』

(松籟社, 2014 年, 6,804 円)

編著者の菅英輝氏はここ数年相次いで国際的な研究会を組織し、アメリカと戦争、冷戦、歴史認識に関する学術成果を精力的に刊行している。誠に重厚な本書はその4冊目にあたる。

編著者によれば、本書の目的は、冷戦の終焉を踏まえた上で、冷戦秩序の変容に焦点をあて、同盟変容と変容に伴う諸問題の歴史的考察をおこなうことである。具体的には、ヨーロッパとアジアの事例を比較検討し、とくに冷戦変容を促した経済的側面に注目すること、冷戦変容の過程で、米ソ以外の国家や非国家的アクターに着目し、「ソシアル・デタント」「下からのデタント」を重視すること、冷戦変容が同盟関係に与えた変化を同盟の文化的・社会的基盤を視野に入れながら考察すること、というものである。

まず第1部「冷戦秩序の変容—変化する経済秩序と『ソシアル・デタント』」において、秋田茂は1960年代後半以降のシンガポールの経済政策、工業化戦略とアジア冷戦の変容について、鄭敬娥は1950-60年代の日本の開発政策とアジアの多国間枠組みの模索について、芝崎祐典は1950年代後半の西ヨーロッパの反核平和運動の展開とそれが冷戦に与えた影響について、都丸潤子は1956年のハンガリー動乱後の難民の受け入れをめぐる英米の政府・非政府のレベルの対応、英米関係について検討する。次の第2部の「冷戦体制の変容と同盟変容—存続する同盟と崩壊する同盟」では、ロバート・マクマンは冷戦期アジアにおいてアメリカが結んだ同盟の起源と展開に関して、松村史紀は中ソ同盟の特質を冷戦の変容に関係づけながら、倉科一希は1960年代のNATOの核兵器共有問題、とくにMLF構想をめぐる米・西独関係の展開に関して、森聡は冷戦終末期の統一ドイツのNATO帰属をめぐるヨーロッパ国際政治について考察する。

第3部「冷戦の変容と日米安保—変質する日米安保体制」において、豊下楯彦は日米安保条約に内在する「論理」の歴史的展開を、中島琢磨は日米の同盟内政治をとくに安保改定と沖縄返還交渉に焦点をあて、初瀬龍平は日米安保体制の外交、軍事、経済面での「バランスシート」を議論する。最後の第4部「同盟と文化・社会変容—同盟の文化的・社会的基盤」では、松田武は日米文化教育交流会議（カルコン）の活動を冷戦と日米関係の脈絡のなかで、藤本博は反戦ヴェトナム帰還兵による活動と彼らの異議申し立てがアメリカ社会に与えた影響を、齋藤嘉臣は1950年代から70年代前半のNATOの意義と必要性を支えた文化的媒体とテキストの変遷について、分析する。

これら14本の論文は学界の第一線で活躍する専門家による刺激的な論考であり、多面的、多角的に同盟に迫る試みである。冷戦と同盟研究の進展に大いに寄与し、今後の研究に重要な示唆を与えるであろう。

最後に、長年にわたり学界において冷戦史・アメリカ外交史研究を牽引する編著者に深い敬意を表したい。

佐々木卓也（立教大学）

川本 徹 著

『荒野のオデュッセイア——西部劇映画論』

(みすず書房, 2014 年, 4,860 円)

本書は、著者が2013年に京都大学に提出した博士論文を基盤にしたもので、日本で初めての本格的なアメリカ西部劇の学術書である。著者は「フロンティア」——自然と文明の相互交渉のさなかでアメリカ文化が創出される境界線——に注目し、そうした「自然」と「文明」が西部劇でいかに展開されてきたかを考察している。具体的には、モニュメント・バレーと鉄道という西部劇を象徴する二大イメージの系譜をたどりつつ、フロンティアが漸次拡張するにしたがい、カウボーイ、さらには核兵器と地球へと議論の射程を広げていく。

序章では、まるで新作映画の予告編の如く、読者の期待を膨らませる語り口で本書全体の見取り図が示される。第1章では、「『大列車強盗』は西部劇か否か」という論争をめぐる、西部劇というジャンルの始原が探求されている。先行研究を丹念に検討し、当時の上映形態と作品テキストを参照し合うことにより、著者は論争の決着に成功しており、見事な学術的成果と言えよう。第2章の前半では、初期の西部劇である『アイアン・ホース』を中心に、アメリカの「文明」を象徴する「鉄道」が映画史で果たした重要な役割が手堅くまとめられている。後半では『トイ・ストーリー3』の冒頭シーン——鉄道と核兵器のイメージが連鎖する——の検討が加わり、西部劇がアメリカの技術開発の舞台装置として継続的に機能している点が論証される。第3章は、アメリカの男性性を象徴する「カウボーイ」の「入浴シーン」に焦点を絞り、「男らしさ」が再配置されていくさまを描き出す。カウボーイの入浴する身体こそが、荒野と文明の対立を調整し、アメリカの新たな男性性を創出する舞台であるという著者の主張は啓発的である。第4章は本書の白眉である。『探索者』の精緻なテキスト分析とともに、西部劇における「自然」の象徴ともいふべき「モニュメント・バレー」の風景イメージが文化史の側面から論じられる。後半の「風景と登場人物の相互作用」の追及を経て結論へと至る道程は、映画研究と文化史研究の快楽を同時にもたらしてくれる。第5章では、『西部開拓史』と『2001年宇宙の旅』のモニュメント・バレーの空撮シーンが比較・検討され、1960年代以降アメリカのフロンティアが空へ、宇宙へと拡大するにつれて、「自然」をとらえる視点がアメリカの国境を越えて宇宙にまで至る過程が詳述される。とりわけ『2001年宇宙の旅』のラスト・シーンの新解釈は大変興味深い。

豊富な論点と緻密な分析により、本書はまるでアメリカ文化が生成される瞬間に立ち会っているかのような新鮮な感覚が味わえる。評者には、「（一般的には荒野だとされる）西部こそがテクノロジーの大規模開発に対するアメリカの自信を裏打ちする」という主張が特に強く印象に残った。

山口菜穂子（明治大学 非）

2014 年度アメリカ学会年次大会分科会報告

於：沖縄コンベンションセンター

アメリカ政治分科会

2014 年度のアメリカ政治分科会は、日米の福祉レジームの比較を中心的なテーマに設定し、報告と討論を行った。報告者の佐藤晶子会員は、覇権国で占領を主導したアメリカが、非占領国の日本で、自国の科学技術をどのように受容させたかについて報告を行った。中でも、米国大統領府予算局顧問であった、W・エドワーズ・デミングの統計的品質管理が民間主導の抗結核薬製造を促し、結核死亡率低減という日本の公衆衛生向上に貢献した過程を明らかにした。占領政策や、日米の社会福祉政策に関する膨大な先行研究を踏まえた上で詳細な情報が提供され、日本の公衆衛生に関する対策が、占領国であるアメリカ政府が派遣した研究者による指導の結果として発達したことが明らかにされた。それに対し、討論者として前嶋和弘会員は、佐藤報告の学術的意義や、日米両国におけるデミングの位置づけに関する詳細なコメントを行った。また、西山は、福祉レジーム論に関する先行研究のレビューを行いつつ、伝統的な福祉レジーム論の枠組みに科学技術の問題をどのようにすれば取り込むことができるかについて問題提起を行った。さらには、フロアから、日本とアメリカの福祉レジームにどのような特徴と違いがあるかなどについて質問があり、活発な議論が展開された。

最後に、次年度のアメリカ政治分科会の開催方式について、簡単な意見交換を行った。これまでは、報告希望者を募り、その希望者に報告をしていただく方式を採用していた。以後は、複数の報告者が相互に議論することが可能になるような統一テーマを募集し、そのテーマに基づいて分科会責任者が報告者を依頼する方式も、あわせて検討してもよいのではないかという提案がなされた。次年度は、例年より早めの時期に分科会責任者からメーリングリストを利用して、具体的な方式について提案を行うこととなった。

(西山隆行)

アメリカ国際関係史分科会

今年度は、平田雅己会員（名古屋市立大学）に「ベ平連による脱走米兵支援活動と米国の干渉 1967-68 年」と題して報告をいただいた。平田氏は米国での公文書調査及び情報公開請求を通じて発掘に成功した米軍機密文書の内容をもとに 1960 年代後半のベ平連による脱走米兵援助活動を対象に米軍が展開していた諜報活動の実態に関して研究を行っており、本報告は氏のこれまでの研究成果の中間的な報告の意味合いを持つものであった。本報告においては、関係文書の存在を 1920 年代前半の「ホワイト戦争計画」を起源とする、米軍による組織的な民間人監視活動に關係すると位置づけた上で、神奈川県座間基地を拠点に米陸軍のスパイ兵士が日本官憲の協力を得ながらベ平連メンバーと接触し脱走ルート解明のための情報収集に努めていた事実が指摘された。また、氏の報告を通して、ベ平連の活動が米国の国家安全保障上の深刻な脅威（具体的にはベトナム戦争政策）となるほどの国際的影響力を持っていた点が明らかにされた。そして、平田氏からは、ベ平連の越境的性格とグローバルな反戦米兵支援ネットワークとの関係性ならびにベ平連が当時の日米関係に与えた政治的影響力の考察など今後の研究の方向性が示された。また、日本のタカ派的な軍事・安保政策の現状を念頭に、将来において自衛隊から日本人脱走兵が出現する可能性を視野に入れながら、兵士の視点からも日米安保体制の是非を論じる必要性も指摘された。

平田氏の報告の後、フロアから、米軍の情報収集活動の目的は何か、米陸軍の諜報活動の全体像はどのようなものか、などの質問が出され、活発な議論が展開された。平田氏の報告は、ベ平連による脱走米兵支援活動に対する米陸軍の対応に注目して日米関係史研究に新たな光をあてるもので、反戦運動史、社会史を組み入れた冷戦史研究の新たな可能性を示唆するものであったと言える。なお、本分科会の参加者は 20 名であった。

(藤本 博)

日米関係分科会

今年度の「日米関係」分科会では、沖縄県での開催ということもあり、地元の沖縄国際大学教授・照屋寛之氏（非会員）に、「基地問題と選挙」をテーマに、ご報告いただいた。照屋氏は、沖縄県明い選挙推進協議会・会長をつとめるだけでなく、沖縄県内で実施されてきた選挙の臨床政治学的な分析で著名な政治学の研究者である。

さて、同氏も指摘しているように、「沖縄のなかに基地があるのではなく、基地のなかに沖縄がある」といわれるほど、沖縄には、在日米軍基地が偏在している。それゆえ、沖縄県民の基地への関心はきわめてたかく、これまで実施されてきた、各種選挙においても、基地をめぐる問題がクローズアップされてきた経緯がある。とりわけ、普天間飛行場（宜野湾市）の名護市辺野古への移設が、近年の選挙戦の大きな争点となってきたことは、周知のとおりである。

そこで、今回の報告では、2010 年の沖縄県知事選挙と参議院議員通常選挙、2012 年の衆議院議員総選挙、さらには、2014 年の名護市長選挙を例にとり、各政党が、どのように、基地問題をとらえてきたかが紹介された。そこから明らかとなったことは、選挙の折りの公約はまもられることなく、たんなる“口”約でしかなかったという事実である。そのため、有権者の政治不信が増大するという結果をもたらすことになってしまっているのだ。

今後も、沖縄県においては、在日米軍基地が争点となる選挙が実施されるであろう。われわれ「本土」に住む者たちは、基地の問題を他人事としてとらえるのではなく、自分たち自身の問題として、真摯にむきあっていく姿勢が求められるのではなかろうかとの思いをつくしたことはいうまでもない。

なお、この興味深い報告に対して、フロアから、数多くの質問が提起された。しかしながら、時間の制約もあって、十分な議論をつくせないまま、分科会を閉じざるを得なかった。そのためであろうか、閉会後も、会場外で、報告者に対する質問があいついでいたことを付言しておきたい。

(浅野一弘)

経済・経済史分科会報告

木下なつき会員（北海道武蔵女子短期大学）から「企業・組織形態から見る黒人生命保険会社の歴史と戦略」とのテーマで報告をいただいた。以下は木下氏による要旨である。

これまで報告者は、黒人生命保険会社の経営戦略について、各社が市場とする黒人社会の特性および関係性という点から検討してきた。報告は当日配布のレジュメ・資料に沿って進めた。黒人社会の相互扶助の伝統、共済組合の設立、19世紀末から各地で起業された黒人生命保険会社の経営戦略について企業形態（株式会社・相互会社）ごとに論じた。今回の質疑から、アメリカ政治が黒人に対する措置を歴史的に変化させてきた中で、それぞれの動きが黒人生保企業経営に与えた影響という視点からの分析という示唆をいただいた。以下、三つの時期に質疑をまとめた。①南北戦争後、解放黒人を自立させるため、解放民局設立等の動きがあったが、黒人生命保険会社設立においても、白人の支援があったのかどうか。黒人生保への白人の関わり方として、黒人企業家への白人名士からの助言や、設立直後の現場トレーニングを白人生保エージェントが指導した事が先行研究で指摘されている。背景に、黒人による黒人のための生命保険会社起業という黒人社会内部での助け合いが黒人の自立を推進し、白人も様々な面から支援するべきであるという考えがあったと言える。②公民権運動と黒人生保会社との関係について。紙幅の都合から詳細を記す事はできないが、黒人生保は黒人の公民権獲得を目標として掲げ、実際に運動を後援していた一方、公民権獲得による黒人の部分的統合が経営基盤を危ういものとし、結果的に、黒人生保ビジネスのパラドキシカルなあり方を示した点だけは記したい。③黒人市長など黒人政治リーダーが誕生した20世紀第4四半期、黒人が政治力を獲得した地域とそうでない地域で、黒人生命保険会社の経営に差異があったのかどうか。この時期は黒人生保企業の縮小期であり、生き残った企業と淘汰されていった企業に分かれていく。前者と後者の違いについて、報告者は企業形態・戦略を中心に分析してきたが、②同様、政治的变化が黒人生保経営に及ぼした影響を分析視角として研究を進める必要があると再認識させられた。

（名和洋人）

アジア系アメリカ人研究分科会

1) アジア系アメリカ研究とビューティ・カルチャー

―戦前の日系人社会における裁縫学校を中心として―（北脇実千代）

本報告は、ビューティ・カルチャーを創り出す側に焦点を置く近年の動向をふまえつつ、第二次世界大戦前のロサンゼルス日系人社会で、裁縫という行為にどのような意義があったかを、当時設立されていた裁縫学校に焦点を当て発表された。渡米後初めて洋裁を学ぶ女性たちが多かったなかで、裁縫技術の習得は、女性たちに消費者としてだけでなく創り出す側としてビューティ・カルチャーに関わる機会となったと同時に、主流社会への参入を考える契機ともなり、裁縫学校が果たした役割も大きかった。

質疑応答の中には、ジェンダー的視点から「職業化への足がかり？」など、刺激的で的確なコメントがあったと思う。

2) Bridging Theories of Trauma and Disability: War Trauma and the Asian Diaspora

トラウマセオリーとディスアビリティスタディの提携：戦争トラウマとアジア系ディアスポラ（加瀬保子）

ディスアビリティスタディは障害をトラウマと定義することを拒む。「健常者」と「障害者」との差異を問題化し、障害表象に潜むイデオロギーに挑戦、アメリカで障害者の権利獲得のため発展した経緯を考えると、その政治的重要性は否めない。しかし、戦争、自然災害、事故など主体の自然化された常態を覆す障害のインパクトを論ずるには（ジェイムズ・バーガー等）、トラウマ理論との連携は必須だ。

発表は英語で、日系作家ジュリエット・コーノとダーシー・タマヨセによる第二次世界大戦を描いた作品を、障害・トラウマの観点から論じられた。時間的制限で参加者からの質疑応答の余裕がなかった点が残念だったが、トラウマ理論とディスアビリティスタディの提携という、まだ日本では新鮮な視点は注目されたのではないだろうか。

（野崎京子）

「アメリカ女性史・ジェンダー研究」

アメリカ女性史・ジェンダー研究分科会では、白石（那須）千鶴会員から、「動物利用についてのポストコロニアリズム分析の試みー毛皮取引と大平原先住民部族の変容を取り上げて」と題する研究報告が行われた。報告の趣旨は、19世紀アメリカ大陸の大平原で行われていた毛皮交易が大平原先住民部族に与えた影響を、植民地主義の問題性から捉え直した上でジェンダーの観点から分析することであった。アメリカにおける動物問題の議論は、白人中産階級を中心とする動物擁護運動や倫理的菜食主義の主張から、英米に特有な動物保護の動向が強調されてきており、そこに多文化主義的観点が欠如していることを、報告者は指摘した。そして動物問題を、ジェンダーの視点からのみならず植民地主義的観点から分析・議論する必要性があることを示した。そのための具体的事例として、19世紀後半に大規模に展開された西部開拓の中で、大平原先住民部族に致命的な影響を与えたバッファロー絶滅の問題を取り上げ、バッファロー依存の生活様式への変化が先住民女性に与えた影響を、当時のアメリカ社会の植民地主義的視線と共に分析した。

報告後の質疑応答では、動物と人間の境界をめぐる議論が示唆すること、バッファロー保護法案をめぐる議論、先住民女性と動物との関係を取り上げることの意義、大平原先住民部族における性別役割分業の変化や一夫多妻の増加、婚姻年齢の低下などの家族形態の変化による女性の地位の変化、先住民女性による毛皮ロープ作成に見られる動物との関わり合いと女性の地位の変化との関係、さらに白人との毛皮交易による市場経済との関係など、さまざまな問題に関する質問や意見が寄せられた。そして特に家族形態の変化や女性の地位の変化などについて、多様な観点から活発な議論が展開された。

（小野直子）

アメリカ先住民分科会

「米国先住民資料の所在と管理情報の現状、国立民族学博物館の Info-Forum Museum 構想の報告」

伊藤敦規（国立民族学博物館）

今年度の本分科会では、伊藤敦規氏（国立民族学博物館）が、「米国先住民資料の所在と管理情報の現状、国立民族学博物館の Info-Forum Museum 構想」と題して報告を行った。「フォーラム型情報ミュージアム」構想は、世界各地の民族学博物館が所蔵する民族誌資料について、収蔵機関・ソースコミュニティ（民族誌資料の制作者や使用者やその子孫）・研究者、そして一般利用者がより効果的に研究、閲覧、共有することを目的とする。報告では、まず、国内における北米先住民資料の所蔵状況について、9つの機関が関連資料（特にホビ族）を所蔵していること、データ管理手法や公開状況は各機関の裁量に負っており、利用者による関連資料の網羅的な検索や機関間の横断検索が不可能であることが報告された。その上で、ソースコミュニティの人々と所蔵機関との間に横たわる物理的、経済的、言語的、情動的なアクセスにかかわる障害が指摘され、それらを是正するため、複数の博物館による ITC 技術とソースコミュニティとの協働の試みが紹介された。その一つとしての「フォーラム型情報ミュージアム」構想は、記述の多言語化、広範囲にわたる対象ソースコミュニティの設定や公衆送信に伴う著作権処理において独自性を見出している。最後に、伊藤氏がこれまでに行った米国先住民資料約 700 点の制作者調査とその結果をソースコミュニティに共有する事例が紹介された。こうした試みは、個人、家族、コミュニティの記憶の想起と再収集の契機となり、さらにソースコミュニティに資料管理や資料情報管理への直接的関与の機会を担保することに大きな有用性を見出すことができる。報告の後には、フロアから同構想における多言語表記（日、英、ソースコミュニティでの使用言語）や民族誌資料の属性に関する質問が出され、今後の取り組みに対する課題についても活発な討論が行われた。

（野口久美子）

初期アメリカ分科会

沖縄コンベンションセンターにて、昨年に引き続き「初期アメリカ」分科会を開催した。本分科会は、17・18 世紀の北米植民地の文化と歴史を、大西洋世界を視野に入れて様々な角度から検討することを目的に立ち上げられた。

ただし、初期アメリカ研究に従事する人員が必ずしも潤沢ではないこと、さらに年次大会において、19 世紀を扱う分科会が開催されていない状況を踏まえ、賛同者一同が話し合い、イギリス帝国史・大西洋史の文脈を重視するというこれまでの方針を維持した上で、取り上げる時期を 19 世紀中葉まで伸ばし、本分科会の継続と拡大を図ることとした。こうした賛同者一同の希望は幸いにして企画委員会の承認を得ることができ、無事継続開催される運びとなった。今回の企画は下記である。

報告者：石川敬史（東京理科大学）

題目：J・G・A・ポーコックの「新しいブリテン史」におけるアメリカ革命論

本報告は、石川が翻訳に参加した J・G・A・ポーコック（犬塚元監訳）『鳥々の発見—「新しいブリテン史」と政治思想』にみられるアメリカ革命論を紹介したものである。「ブリテン史」という論点は、アメリカ研究はもとより、イギリス史研究においてさえも論争的なものである。本報告についても、現在のアメリカ研究の動向からみて、ある種の「先祖返り」なのではないかという批判があった。それと同時に、本書の重厚な学術的内容によって、分科会に参加された方々の間では時間を超過するほどの活発な議論が展開された。

本分科会には、多様な分野から 24 名の方々が参加された。この分科会を通して、「初期アメリカ」というテーマが豊かな学際性を有することが再認識されたのではないか。ただし、19 世紀を扱うというテーマの拡大が重い課題であることは確かであり、今後はこの課題の解決を通して、本分科会の充実を図りたい。

（石川敬史）

文化・芸術史分科会

今年度も引き続き「展示」というテーマに緩やかに関連した二つの研究報告が行われた。一つ目の発表、「万国博と地域のアイデンティティの再構築：金門博（1939-40 サンフランシスコ）を例として」において深見麻氏は、同時期に開催された 1939 年ニューヨーク万博の「未来志向性」と、サンフランシスコ博の「過去志向性」という対照的なイメージに言及し、果たして実際にサンフランシスコ博は過去志向的だったのかという問題を提起した。そして「Pageant of Pacific」というテーマに基づいてデザインされた万博のパビリオン建築の多様性や折衷主義にとりわけ着目することによって、そこには確かに太平洋沿岸文化の多様性と、東西の文化の結節点としてのサンフランシスコというコンセプトがあったと指摘し、合衆国の「歴史」や「伝統」を強調したパビリオンや展示内容と同時に、未来の太平洋沿岸文化とその中心としてのサンフランシスコという主題が提示されていたとの見解を示した。

二つ目の報告、「エト・ゲンジロウとロバート・スチュアート・キューリンをめぐって」において瀧井直子氏は、人類学者でブルックリン美術館アジア美術部門の学芸員であったキューリンと、そのコレクションのアドバイザーであり、米国で活躍していた日本人画家エト・ゲンジロウの交流をブルックリン美術館のキューリン・アーカイブ等からの豊富な資料を駆使し鮮やかに蘇らせた。まず瀧井氏は、欧米のジャポニスム演劇の舞台美術やイラスト制作およびアメリカ印象派との交流などを中心にエトの画業を概観し、次にキューリンが訪日した際の記録である『訪日報告書』を軸として、キューリンの日本における収集活動をどのようにエトが支援していたのかを実証的に明らかにした。また、エトがキューリンの計画していた『漂義紀略』翻訳出版プロジェクトにも携わっていた件に関しても言及があった。

両報告とも未開拓の主題や研究領域に切り込んだ先進的な研究内容であり、またより広義においては「展示」や「日米文化交流」というアメリカ文化研究の主要テーマに関連するという点において重要であり、実に刺激的な発表であった。

（江崎聡子）

訂正 会報 185 号

7 頁	【タイトルおよび 1 行目】	誤『世界地名大辞典北アメリカ』 正『世界地名大事典 7 北アメリカ I』『世界地名大事典 8 北アメリカ II』
同	【6 行目】	誤：両国の州や郡市町村， 正：両国の州市町村，グリーンランドの地名・地形，
同	【4, 9, 18, 47-49 行目】	誤：辞典 正：事典
8 頁	【紹介執筆者所属】	誤：北海学園大学 正：北星学園大学

以上につきまして訂正し，お詫び申し上げます。

新入会員

浅川友幸	東洋大学（非）	文
斎木郁乃	東京学芸大学	文 衆 民
瀧井直子	早稲田大学（非）	芸 日
阿部暁帆	明治大学（非）	文 女 民
秋田真吾	神戸大学（院）	政 史 思
細野香里	慶應義塾大学（院）	文 衆 米
小泉由美子	慶應義塾大学（院）	文
山口航	同志社大学アメリカ研究所	日 外 政
藤村希	亜細亜大学	文 米
大賀瑛里子	日本女子大学（院）	史 女 民
齊藤葵	慶應義塾大学（院）	文
大久保良子	防衛大学校	文 女 米
深津勇仁	リンデュホール中高等学校	外 日 言
磯崎安奈	群馬県立女子大学	政 社 女
Wayne E. Arnold	関西外国語大学	文 米
Edward K. Chan	愛知大学	文 衆 米
齋藤祐実	京都大学（院）	民 史 社
川久保文紀	中央学院大学	政 外
宜野座菜央見	明治大学（非）	史 社 衆
平野邦輔	ヴァージニア大学（院）	民 日
相川裕亮	慶應義塾大学（院）	宗 政 思
赤木大介	大東文化大学（非）	芸 衆 言
ジュリー・ジョイ・ヌートバー	大分県立芸術文化短期大学	史 類 言

事務局からのお願い

事務局へのご連絡は、下記の学協会サポートセンター内住所までまでお願いいたします。

編 集 後 記

本号が届く頃には結果が判明しているが、中間選挙である。アメリカが直面する諸問題の解決し難さを現職者の指導性に一点投射することが世論の一端であるように思える。ビッグデータを駆使して汲み取られる世論の動向は古典的世論調査の技術域を越えているが、世論をめぐる

リップマンの古典が提示した，大社会，疑似現実，ステレオタイプ等の概念は，今日の国際社会の状況を捉える視角として今でも有効であろう。リップマンの冷徹な眼差しの根底にあったのが，百年前の世界大戦後状況への幻滅感であったことに，ある種の既視感を覚えてならない。

(I.H)

2014 年 11 月 25 日 発行
アメリカ学会
〒231-0023 横浜市中区山下町 194-502
学協会サポートセンター内
Tel: 045-671-1525 Fax: 045-671-1935
<http://www.jaas.gr.jp>

発行人 松 本 悠 子
編集人 下 河 辺 美 知 子
印刷所 啓文堂松本印刷
〒162-0041 新宿区早稲田鶴巻町 565-12